

バングラデシュを知るために

坂井華奈子

バングラデシュ人民共和国はインドの東側に位置し、一部の国境はミャンマーと接している。ガンジス川やブラフマプトラ川、メグナ川といった大河が合流してベンガル湾に注ぐ土地であり、洪水やサイクロンの印象がある方も多

ンガル」を引くと、主にインドの西ベンガル州とバングラデシュをあわせた地域からなることがわかり、その定義や歴史を知ることができる。

大橋昌明、村山真弓編著『バ

ングラデシュを知るための六〇章 第二版』（明石書店

二〇〇九）は、この国について総合的に扱った入門書として充実した内容の一冊である。

四〇名以上の執筆者により、幅広い内容が解説されている。初版は二〇〇三年発行だが、第二版では三五ページ増となり、その間の変化を反映した加筆・修正がなされている。類書として白田雅之、佐藤宏、谷口晋吉編『もっと知りたいバングラデシュ』（弘文堂 一九九三）がある。

同国は一九七一年の独立により東パキスタンからバングラデシュとなったわけだが、東西パキスタンがインドから独立したのは一九四七年であり、短期間にたて続けに独立を経験した珍しい国であるといえる。その歴史や独立の背景について知るには次のような資料が参考になる。加賀谷

寛、浜口恒夫著『世界現代史 一〇 南アジア現代史 II パキスタン・バングラデシュ』（山川出版社 一九七七）ではムガル帝国の衰退からイギリスによる植民地化までさかのぼり、パキスタンやバングラデシュの民衆にとつて国家の意味とは何かという疑問を軸に両国の歴史を概観している。年表や参考文献リストが収録されており両国独立の流れの理解に役立つ。この国はイスラム教を国教とし、ムスリムが人口の九割以上を占める。ムスリムとしての意識と「アシュ（クニ）」という概念からバングラデシュ社会の把握を試みたものとして、高田峰夫著『バングラデシュ民衆社会のムスリム意識の変動 デシユとイスラーム』（明石書店 二〇〇六）がある。著者の博士論文を元にした五六二ページの大部の書である。

佐藤宏編『バングラデシュ 低開発の政治構造』（アジア経済研究所 一九九〇）は、独立後の政治・経済状況について軍や各種指導者層といった権力構造からみた研究書であり四名の著者による六つの章から構成されている。

現地の暮らしを描いたものもいくつかあげてみたい。

ロキア・ラーマン・カビール著・大岩豊訳『七人の女の物語 バングラデッシュの農村から』（連合出版 二〇〇〇）では、一九七〇年代から農村女性の自立に向けて活動してきた著者が村で出会った女性達の人生に起きた数々の困難な出来事を通して、現地の農村社会における女性の状況が鮮烈に語られている。一方、K. ガードナー著・田中典子訳『河辺の詩 バングラデッシュ農村の女性と暮らし』（風響社 二〇〇二）では一五ヶ月間のフィールドワークを通してイギリス人女性が経験した村の暮らしが人々の心情に寄り添って描かれており、また違った印象を与える。男性の視点から書かれたものとしては細矢進吾著『ジョイ・バングラデシュ 私のみた「混沌と質朴」の国』（耀辞舎 一九九三）がある。灌漑用ディーゼルエンジンの技術指導のために派遣された著者の二年の駐在経験を通して見たこの国の様子が記されている。

は、「援助の実験場」とも呼ばれるこの国の事例をもとに、二名の執筆者による多様な切り口から「援助」という現象について検討している。向井史郎著『バングラデシュの発展と地域開発 地域研究者の提言』（明石書店 二〇〇三）では地域研究者という立場から人口問題を軸に就業機会や食糧、出稼ぎや教育の問題についての提言がなされている。都市部の開発に関するものとしては、三宅博之著『開発途上国の都市環境―バングラデシュ・ダカ 持続可能な社会の希求』（明石書店 二〇〇八）があり、首都ダカにおける環境問題、廃棄物といった内容を扱っている。

バングラデシュ出身でグラミン銀行の創設者、ムハマド・ユヌス氏が二〇〇六年にノーベル平和賞を受賞したのは記憶に新しい。グラミン銀行をはじめとするマイクロファイナンスについては、本誌一三七（二〇〇七年七月）号の同コーナーで資料を紹介している。（せかい）かなこ／アジア経済研究所図書館

概要をつかむために、辛島昇ほか監修『南アジアを知る事典 新訂増補版』（平凡社 二〇〇二）の地域編でバングラデシュを参照すると、七ページにわたり基本情報の解説がある。もちろん項目から引くこともでき、例えば「ベ